
四季蘭采～雛菊～

森神。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四季蘭采～雛菊～

【Zコード】

Z6933E

【作者名】

森神。

【あらすじ】

突然あらわれた7人の魔法使いに巻き込まれる…不思議な雛菊探しの始まりだ～！

柄秘密露愚（ヒロローグ）（前書き）

キャラデータベース

「サキ」

この物語の主人公であり、アパートの大家さん。

得意魔法系統：回復系魔法

性格：のんきで天然

B90W64H95

年齢：25歳

身長：164

趣味：料理（食べること）

特技：料理（作ること）

柄秘密露愚（ハピローグ）

ただいま…ボク

帰つて來たよ。

さあー、みんな樂しきつよ。

さあー、宴を始めよつよ。

桜、舞い散る満月の夜…。

彼女（？）は帰つて來た…

この地へと…

「踊れ～。さあ～宴の始まりだ～～！」

遠吠えのごとき声で、この現実世界とはまた別の、遠い遠い別世界
で、物語は始まつた。

柄秘露愚（ハロローグ）（後書き）

感想よりじくお願ひします。

第一章・感染結界（前書き）

キャラデータベース

「サキ」

この物語の主人公であり、アパートの大家さん。

得意魔法系統：回復系魔法

性格：のんきで天然

B90W64H95

年齢：25歳

身長：164

趣味：料理（食べるのこと）

特技：料理（作ること）

第一章・感染結界

「お掃除、お掃除うれしいな～！楽しいな～！へイ！」

調子の狂つた音楽を歌つてるのは、自称、普通の魔女つ娘「南沙紀」である。彼女はこの、ササキ荘に住んでいる。ササキ荘は8部屋のアパートで、住んでいるのはサキだけというむなしいアパートだ。しかし、今日から住民が増える。しかも7人もだ。このアパートはいつきに満室になる。だから、こうやって、サキが掃除をしているのである。時間はもう昼の一時をすぎている。そろそろ来るところだが…

「お邪魔します～う」

7人が同時に来たらしく、かなり大きな声が鳴り響いた。

「はーいどうぞ～」

7人が同時に来つてきた。7人とも魔法使いである。不思議な話である。7人の魔法使いが、同じアパートに同じ時間に集まるなんて…。しかしサキはそれを軽く無視してそれぞれを部屋に案内した。言い忘れていたが、サキはこれでも大家さんである。

「大西 昨夜さんは2号室」
「木上 麗美さんは3号室」
「榎原 結衣さんは4号室」
「宰領 霧野さんは5号室」
「方徳 慈綾さんは6号室」
「佐藤 幸さんは7号室」
「大倉雪さんは8号室」

サキは皆を部屋まで案内すると、台所へ行き、新入居者歓迎会で出す料理の準備にいそしんでいた。しかしあエプロン姿で台所に立つサキはかなりカワイイw包丁の使い方でわかるぐらい彼女は料理がうまい。

「今日は～あたら～しい人たちが～きましたよ～」

また調子の狂つた音楽を歌つてゐる。そうとうの音痴らしい。

ふと時計を見るともう夕方の4時。歓迎会の準備はほぼ完璧だ。

「我ながら見事なできだー。」

本人も言つてるとおり。豪華ホテル並みの料理が立ち並ぶ、ボロアパートにしては十分すぎるほど準備だ。歓迎会は6時に行はれる。ちょっと早すぎだ。これじやあせつかくの料理が歓迎会の時には冷めている勢いだ。まあしかし、彼女も魔法使い。2時間の間料理の温かさを保つことぐらいは簡単にできる。

「この料理を2時間の間、冷めなこいつにしてください。ミスター フィクランドラー」

最後の呪文は、保温の呪文らしい。とくにすることの無くなつたサキは、テレビをつけた。この時間は幼児番組を放送しているが、サキは25歳（バスト90）なのでこちよつニュースをみた。この時間のニュースはバリエーションが豊富なので、2時間くらい簡単に暇をつぶせる。

「さて、次のニュースです。今日みめい、れいじゅふひなきくちよつわんぢょうあい 靈樹府雛菊町参丁目（この世界で2番目に住んでいる人が多い町）で謎の結界が現れました。この結界により謎の感染ウイルスが発生し、全人口の8割が緊急入院しました。」

「えっ、靈樹府雛菊町参丁目って…おばあちゃん！」

「感染者確認の方は、『263-465』まで」「連絡ください。」

「電話しなきゃ…」

サキは一目散に受話器にむかい、『263-465』に電話をした。

「「連絡いただきありがとうございます。こちり、特別ウイルス被害者確認センターです。」

「あの！みなみちかこ 南智佳子という方は…おられるでしょうか。」

「少々お待ちください。」

ほんの1分程度の待ち時間もサキには5分ぐらいに感じられた。まあ無理も無い。サキはサキが3歳の頃に両親が離婚。母に育てられたが、6歳の頃に母が死に、それ以来、ずっとおばあちゃんに育て

られていた。だから、この事件はサキにとってはかなりのショック
だつたはずだろ？。

「南智佳子さまみ該当する人物が一名いました。年齢86歳、誕生
日8月7日、血液型A型よろしいでしょうか？」
「は…い」

第一章・感染結界（後書き）

感想よろしくお願いします。

第二章：ボロアパしようじょーず（前書き）

キャラクターーデータベース

「キリノ」

ちよとかわいい系の元気な子

得意魔法系統：光系魔法

性格：あかるい

B 84 W 60 H 85

年齢：24歳

身長：160

趣味：ゴルフ

特技：ゴルフ

第二章・ボロアパショウジョーず

「そんな…おばあちゃんが…」
あまりのショックで、いつもの音痴な歌もでこなかつた。

「ンンン

ノックの音がある。

「ンンン

サキは全然きずいていない。

「『めんぐだせーい。』

よつやくきずいたようだ。

「はい、今出ます。」

流していた涙を必死でこらえた。

「すいません。気が付かなかつたもので…」

ドワを開けると、そこには、新入居者7人組みがたつていた。

「知つてますよ。」

その言葉にサキは意味がわからず。疑問符を頭に浮かべた。

「今、何時ですか?」

「えつ5時半…」

違つた。

「もつ、もう7時!」

「ええ、いやーパーティーのために、みんなで5時半に来たんです
けど、なんか鳴き声が聞こえたので、聞いてみると…」

「えつ聞こえてたんですか!」

「まあ…」

「…………」

「すいません、今すぐ、パーティーしますね。」

「いや……無理しないでください。」

「私たち7人は仕事でここに来たんです。」

「は？」

「結界については、私達は予想してたんです。」

「あのー、意味がわかりませんが……」

「実は、1ヶ月前に『TENSIDE』が復活したんです。」

「『テンシーD』……。」

「それって、千年前になんたらのあれですか？」

「そうです。」

『TENSIDE』について、皆さんに説明いたしました。TENSIDEとはローマ字読みです。天使のことです。Dは墮。つまり、墮天使のことです。まあこいつは、千年前にこの地で数々の殺人を犯し、次元追放を食らつたやつです。次元追放は、その名の通り、別次元へと追放されることです。普通は99.99%脱出不可能なのです。何かの拍子に0.01%の何かが発生して、復活したのでしょうか。

「そして、今度は復讐に来たのでしょう。」

「あのー天使の復活と、この地へ来ることに何の関係が？」

「墮天使よ、来たれし時は、雛菊を。」

「それ、有名な俳句ですよね。」

「この地域の特有花は？」

「雛菊！」

「この地域が墮天使の出現に何らかの関わりをもつてているの。」

「ちなみに、私達は、今日会つたばかりだから。」

今のは全部レイが喋った言葉です。よくこんな長々と演説気どりができるものだ。たぶん最後のはボケなのだろうが、実質のところ本人に聞かないとわからない。

「その事について解明したら、おばあちゃんは治るの？」

「たぶん… 断言はできないけど。」

「私も仲間に入れてくれないかしら？」

「OKよ。」

「… いっつとしては、人数が多いほど好都合だから。」

第二章・ボロアパしようじょーず（後書き）

感想よろしく

第三章・1週間とは恐ろしい…（前書き）

キャラクター＝データベース
「サクヤ」

ツンデレ的だが、デレはない
得意魔法系統：火魔法

性格：ツン

B79 W53 H75

年齢：26歳

身長：169

趣味：紅茶で一服

特技：ナイフを投げること

第二章・1週間とは恐ろしい…

「私も仲間に入れてくれないかしら？」

あの時は、なんか興奮して、つい言っちゃたけど大丈夫だろうか…。こんなことを思いながらベットにもぐり、はや2時間。全然眠気が来ない。たぶんまだ興奮してるのだろう。時間はもう深夜の2時。良い子も悪い子もベットに入つてスカッピーしている時間帯だ。部屋は時計の音だけが鳴り響いていた。

「考えても仕方ない！よし、おやすみ！」

発言とわずか23秒でスカッピータイムに入った。

さつきの部分に全然関係なく。一周間後のこと。無事歓迎会も行い、すっかり仲良くなつて、この生活になじんでいた。仕事は全然しなくなつたとさ。

クッククドウードウールドゥーー（アメリカではコケコッパーの事を
こけこっぷーー）

二ワトリは全然関係無く、田ざまし時計が鳴り響いた。しかし、サキではない。8号室から聞こえる。その騒音にサキは眼がさめた。そして、即外にでて、「うるさい……………いつ…」

考えたことは皆同じ。8号室の人以外全員外にでてそう叫んでいた。すると、8号室から、ゾンビに襲われつつ耳元でダイナマイトが2～3個一気に破壊されたような顔（わかりにくく顔のこと）をした、ユキが出てきた。あの騒音、『これさえあれば絶対に起きれます。@近所付き合いが悪くなつたりするかも田ざまし時計。定価2560円』の殺意的騒音力を間近で聞き、死にそつになつた本人が登場した。

「ユキ～明日それ使つたら殺すね～」

下の2号室サクヤがそういった。

「サクヤ～それはいい過ぎよ！、仲間なんだから。」

アヤがそういう瞬間、コキが何かに気付いた。

「つかぬことおたずねしますが、皆さん、私たちは何の仲間なのでしょう。」

「あんたバカ～？それは…なんだつた？」

キリノも忘れている。

1週間とは恐ろしい…

「そんな事も忘れては困るな、皆さん。初歩的な推理だよ。ワトソン君、皆に説明してくれたまえ。」

レイミがおどけて、コイの方を向く。

「えつ、わつ、私！。あつ、ハイ。忘れました。ズバッと言つてやつて下さい、ホームズさん」

「えつ、それは…その～」

ホームズをも度忘れさせる。1週間とわ恐ろしい…

「も～皆、何忘れんの？」

サキが割り込んだ。「この、スーパー天然超ドジッ子が言つことはほぼ99%はずれである。

「1日30食限定の『じくわい、食べたら口からウマ～』ってレーザー光線が出るようなスーパーケーキ』

を手に入れるために、少しでも人数が多いほ…………」

「違います！皆さん。墮天使の破壊です！ふう～1週間とは恐ろしいものです。」

ミコキが半分キレぎみで割り込んできた。

普段は優しい眼鏡っ子のミコキがキレぎみなので、皆が一気に静まり返った。

「ふう～ミコキさんは恐ろしいものです。」

コキがふざけて言いました。

ミコキの攻撃！

コキは力尽きました。

そして、まじめに仕事をしていたミユキによると、この1週間、結界が大きくなったり、ついにウイルスによる死亡者がでたり、米の自動販売機にゴキブリが入っていたなどの事件があつたらしい（最後の関係無いじゃんって思つた？ 気にしたら負けだよ。あと、最後のはミユキ流のジョークらしいぞっ！）

「それはまた大変ね～。最後のは除くけど」

アヤがぼそつと言つた。

ユキはさつきのジョークで笑い口ケで、ただいま発言不可能です。

「それでね、少し、有力な情報が入つたの。」

ミユキがうれしそうに言つた。

「実は、結界が大きくなる前に雛菊が光ったのを見た人がいるのよ。

「よし、行くか～」

キリノの発言に皆が賛成した。

第二章・1週間とは何のことで…（後書き）

感想よろしく…

第四章：知らない人に話かけられたら、全力で無視しよう。（前書き）

キャラクターデータベース
「ミユキ」

メンバーでゆいつの眼鏡つ娘

得意魔法系統：風魔法

性格：天才だが少しどジッ子

B 84 W 59 H 85

年齢：25歳

身長：171

趣味：読書

特技：本の暗記

第四章：知らない人に話かけられたら、全力で無視しよう。

深い森を脱けると…

「わ～、綺麗！」

アヤは声を漏らした。

そこは、一面が雛菊に覆われてあた。

雛菊調査に行く事になつたサキ達は、情報を元にこの場所を探しだした。

そして、今にいたる。

「あら、お密さん？」

誰もいない、雛菊園で透き通るような、麗しい声が聞こえる。

「貴方は…誰？」

サクヤが反射的に言返しす。

「私?、さあ、誰でしょうね?」

謎の声が淡々と聞こえる。

「もおー、とつとと出できなさいー！」

今日の朝、楽しみにしていた、マグロを魚に取られたうえ、「はんを焚くのを忘れていて、今日は朝ご飯を食べていないサキがイライラしながら言った。

「まあ、そんなんにイライラしなさんなつて！」

この言葉と共に、辺りが静まり返った。

と、

「なつ、何！」

周りの木達が急に揺れだした。そして、奇妙なメロディーまで流れ出した。

「ピアノ？」

ミユキの言つた通り、メロディーの正体はピアノであった。曲名『血の紅にそまる兔』（この世界で、だいぶ前に作られた曲で、音階が外れすぎていて聞く者を不快にする）そのメロディーは、聞く者の頭に直接入り込むような感じだ。

「あっ、ああああー！」

急にユキが叫びだした。頭を抱えている。

「ユキ、どうした！」

キリノがユキを気遣つた。

「ユキさんは、水の魔法使いさんなのね。」

謎の声が大きくなつた。

「間違いない。近づいて来ている。」

レイミが気付いたが…

バタ！

ユキが倒れた。

「ちょっと、貴方は何者！」

サクヤがキレた。

「私？、私は、裁量寺千葉樹さいりょうじせんばやしづき」

また声が大きくなつた。

「風が早い、キリノ逃げて！」

ミユキの一言に反射的に逃げた。

サツ

服に切れ目が入る。

「ありがと…」

「サキ逃げて！」

キリノの声は、ミユキによつて消された。
サキも反射的に逃げた。

皆の目の前に綺麗な少女が現れた。

「貴方は…」

ミユキは知つてゐるよつと答えた。

第四章：知らない人に話かけられたら、全力で無視しよう。（後書き）

感想よろしく

第五章・風鈴少女（前書き）

キャラクターーデータベース

「チアキ」

初の敵キャラ

得意魔法系統：風魔法

性格：ウザい

B? W? H?

年齢：？

身長：173

趣味：？

特技：神速

第五章・風鈴少女

「なんで！なんで貴方が…答えなさい…チアキ！」

ミユキは彼女を知っているようだ。

「ちょっ、ミユキ！落ち着いて。」

めうすぐプッヂンつて鳴つてドカーンつてなりそうなミユキをコイが止めた。

「てか、説明してもらわな訳がわからん。」

こう言ったレイミに対し、ミユキが呟いた。

「お母さんを…お母さんを殺したのよ…」

話口調はどんどん大きくなる。

「私が、この仕事に着いて、3ヶ月が過ぎた位に大量殺人を繰り返したのが彼女！その時にお母さんが！」

許せ無かつた！そして、ようやく彼女を捕まえたの…もちろん、次元追放にしたわ！」

彼女の目に涙が浮かんだ。

「なのに…なのに、なんで貴方がここにいるのよ！」

ミユキが杖を振った。大きな風の刃が彼女に向かいかかる。

もとい、ミユキは風の魔法使い。相手の風向きを読むくらい簡単に出来る。

「ミユキ～貴方には感謝してるわ～」

「レイミ、逃げ…キリノ！」

レイミに向かいながらキリノに攻撃。逃げきれ無かつた。キリノが木に叩きつけられる。

そのまま、レイミに突撃！レイミも木に叩きつけられる。コイが自己結界を張る。コイの結界は、防御の力があり、衝撃を和らげる。

「チアキは無駄に強い！」

結界を破壊！コイもダウン。

チアキは、ミユキに攻撃をして来ない。ミユキはチアキに攻撃しているが当たらない。

「サクヤ！」

ミユキはサクヤをかばおうとするが、間に合はない…サクヤは気付いてとつさにバリアを張る。

が

チアキはお構いなしに突撃する。

チアキの捨て身タックル！サクヤは力尽きた。

ゲームオーバー

ミユキがサキに近づく一人は背を向けるように立った。

チアキの突撃が始まった。今回はサキにも見える。見えると言つか、姿は見えないがかなりの突風がサキの方向にレールを作った。そのレールに挟まれたサキはあまりの風の強さに、身動きが取れない。ついでにミユキも助けられない。

と

「あっ、お金が落ちた。」突風で落ちたお金を拾うためにサキはしゃがんだ。

「ちよつ！急にしゃがまないでって、うわあー！」

目標がにかわされコントロールがとれなくなつたチアキが木に激突！頭の上でピヨピヨしたもののが回っている。

「でかした！サキ！」

ミユキがそう言って、

杖を振つた。

さあ、ロツクンロールの始まりだ！（皆様のご想像にお任せします。）ちなみに、待ち時間の間サキは、倒れた皆を回復させていました。ロールンロールが終わりました。

ピヨピヨが、なんか頭の上に輪ツカのあるもに代わり、うにあ～つてなつてている。

「チアキ、急になつたんだけど、さつき、感謝してるとかなんとか

言っていたよね？

〃コキの質問に対し返事が無い。

当たり前だ。気絶しているのだから…

「ま、いつか。」

その後、〃コキはチアキをロープでぐるぐる巻きにして、回復した皆とかわづばんじで、ひきずり回し、警察にひきわたしました。

その時、皆はいつの間にか逃げました。

「〃コキって恐ろしい。」

もうひと、全員、力尽きました。

第五章・風鈴少女（後書き）

「ハヤキリて恐ろしき。」

第六章：明日使え無い超ムダ知識（前書き）

キャラクターーデータベース
「アヤ」

赤髪のリーダー的存在の女の子

得意魔法系統：草魔法

性格：しつかり者

B 85 W 61 H 10

年齢：28歳

身長：180

趣味：魔法薬調合

特技：ピアノ

第六章・明日使え無い超ムダ知識

前の事件の次の日。

あるニュースが報道された。

内容は、結界が消失したと言うものだった。そして、事件が解決の一途をとげた。あの謎のウイルスは離菊の基本成分を魔法でなんとやらというもので、中和用のワクチンが作れるとか作れないとかである。

しかし、その中和用のワクチンを作るのに必要な彼岸花が、枯れ始めたらしい。

「彼岸花が枯れたってどういう事よ…」

サキがキレた。

「いやいや、テレビにキレんでも。」

ユイが軽くツッコむ。

「でも、急に消えるなんて変ね？」

サクヤが不思議がるもの無理はない。彼岸花は魔法のなんたらで、枯れない用にしてあるのだ。（葬式用に）

「そういえば、昔聞いた事があるんだけど、この村の隣の村に、草魔法の天才がいて、その人は、どんな所の草でも、枯らしたり、生やしたり出来るとか出来無いとか。」

ミユキが何気なく言った、今後、知らなくてもいい明日使えない超ムダ知識にアヤが反応した。

「その人なら知ってるよ。てか、会った事あるよ。」

「なんで！」

皆が食い込む。

「サイン会」

「はっ？」

「だから、サイン会」

「いやいや、その前に、そんなババアのサイン欲しいか？」

ツツ「ミ担当のコイガツツ「む。

「ババアじゃ無いよ。まだ34だよ。」

「えつっー

皆がびっくりしてアゴが長ーいかんじになつたりならなかつたり。

(注意、びっくりしてもアゴは外れません。外れたら、即、病院に行ましょう。特に、アニメの見すぎな人や、ガキンチョは、ちゃんと覚えておいてね。)

「そんなにびっくりせんでも。」

アヤが呆れた。

「んじや行くかー」

キリノが言いました。

選択肢が、『行こ』と『GO』の一つしかないので、(拒否しても却下されるので。分かりにくい、分かりたくないという人のために例文を用意したよ。

「んじや行くかー」

「嫌！」

「いついく？」

こんな感じです。」

)

行く事になりました。

第六章・明日使え無い超ムダ知識（後書き）

感想よろしく

第七章・海で迷った時は船が助けに来る。山の場合はクマが…助けに来てくれる

キャラクターーデータベース

「ユイ」

青髪の女の子で謎が多い

得意魔法系統：土魔法

性格：いざとなるとかなりしつかりする

B76W50H77

年齢：23歳

身長：159

趣味：？

特技：？

第七章・海で迷つた時は船が助けに来る。山の場合はクマが…助けに来てくれる

「やつと町に着いた。」ユキが口をポカンと開けた。

「ここ町?」

サキがミコキを見る。

「マップによると…」

「どう見ても森じゃんかー!」

ユキがツツコミを入れてみる。

そう、辺りはただの森。

「別名『幻想町』…」

アヤの声に他の皆が食い込んだ。

「祭壇町の別名よ。」

「あの~どういう事でしょうか?」

サキが聞き返す。

「祭壇町。森の中にある、ギネス認定の行きすらさをもつ、外部者で行けた者はいないとか…」

「ちつよと…アヤが会つたつて言つたじゃない!」

レイミがキレた。

「いやいや、こんな所まで来て会いたいとは思わんよ。」

空氣の流れが止まつたので少し、お待ち下さい…

「ま、まあ…こんな所でいても意味が無いから町を探そ…つて、あれ人だ!」

サキが声を上げると。

「こちらでも確認した。あれは間違いなく人間だ。」どこからともなく、軍人の声が聞こえました。

「何?今の声?」

ユイが言いましたがミコキが

「聞こえ無かつた事にしました。」

「ラツ、ラジャー！」

皆がミコキに敬礼しました。

「あの～すいません。」

サクヤが謎の人物に声をかける。

「はい、何でしようか？」

「あつ！この人だよ。伝説の魔法使い！」

振り向いた、謎の人を見てアヤが声を上げた。

「あの～どうかしましたか？」

「すいません！祭壇町に行きたいんですけど。」

ユキが理由を長々と説明するまでじばりくお待ち下さ...

「祭壇町？そんな町もいつ無いよ。」

「へ？」

皆が疑問符を浮かべる。

「あの～いつから無いんですか？」

「昨日。」

「何で潰れたんで…」

「キリノ逃げろ！」

レイミの声が響き渡る。

「へ？」

一步後ろに後退りをした。刃物が彼女の前を通り過ぎる。

「何故つて？私が潰したからに決まっているじゃない。」

全員が戦闘準備に入る。

『いい、私の声は、皆の脳に直接話かけているの。だから、彼女に

は聞こえ無いの『

レイミの声が脳内に響き渡り不快である。（嘘です。たぶん…）

『今から言つ作戦を実行して。』

第七章・海で迷った時は船が助けに来る。この場合はクマが…助けに来てくれる

感想よりこく

第八章・作戦は、上が考えた、机上の空論（前書き）

キャラクターデータベース

「レイミ」

あまり発言しない？かなりの実力者

得意魔法系統：闇魔法

性格：怖い、陰険

B 83 W 58 H 80

年齢：25歳

身長：166

趣味：魔方陣を部屋に書く

特技：相手をおちょくる

第八章・作戦は、上が考えた、机上の空論

『まず、彼女は操られいるわ。影が無いでしょ。あれは、闇魔法の中でもかなり特殊な影操りで、解除するのに時間がかかるわ。そこで、皆に時間稼ぎをしてほしいの。あと、犯人探しも。近くにいるはずだからね。』

レイミが少し、考えてから何をひらめいた。

『あつ、アヤが犯人探して。アヤ、草の魔法が得意だから、解除した後犯人を草なんかで縛つて。』

アヤが軽く笑つた。

「何を止まつてているの？早くかかつて来なさいよ。」

「言われなくとも、とつとと行くわよ！」「

レイミが、伝説の魔法使いを睨み返した。

『戦闘開始！』

合図と共に、皆が散会した。

まず、レイミが手を上に上げた。すると、レイミの周りに紫色の結界が現れた。レイミは何かの呪文を唱えているが、何を唱っているのかは、聞き撮れない。

次に、サクヤがレイミの周りに補助結界を張り、レイミへの攻撃をガードする。

アヤも、無事に相手に見付からずに皆から離れる事が出来た。そして、森の中をくまなく探す。

他の皆は、相手を引き付けている。

実は、前回の事件以来、派手な戦闘が考えられるために、皆は毎日特別訓練をしてきたのである。

そのせいか、パーティー壊滅は無セそつだ。

相手が草の魔法使いなので、火が得意なサクヤに攻撃してもらいたいのだが、サクヤは結界を作るのが得意なので、そっちを優先してもらっている。

一方、水の魔法使いのユキは、無駄に速い足を使って相手を覚乱させている。

他は、各自適当に相手を攻撃している。

まあ、伝説の魔法使いと言うだけあって、かなり強い。

無駄な爆発の連発で、森はメチャクチャになっている。もし、誰かの所有物なら一千萬は降らない弁償金を払っているぐらいだ。

相手は、かなり強い草攻撃を連発している。

全員逃げるのに精一杯だ。

「あら~、早く攻撃して来なさいよ。」

『『だめだ、挑発に乗るな』』レイミの声が脳内に響き渡る。

「あつ、サクヤごめん!」キリノが足を踏みはずしてコケた。相手の攻撃がサクヤの方に飛んで行く。

バシッ

少し火花が散つて結界にダメージが出る。

「なつ、何よこれ!」

サクヤが怒鳴る。

「何で一発の攻撃で結界にヒビが入るのよー!」

サクヤは全力で結界を張っている。一度目の結界はもう張れない。

「レイミ、駄目、後一発食らつたら結界が消える。」全体から焦り

が見える。

と

アヤがレイミの後ろを通り際に
「本体を発見したわ」
と呟いた。

しかし、その矢先

「サクヤ、ごめん。行つた！」
ユイが攻撃を抑えきれなかつた。

バスケットボール位の緑色の玉が飛んでくる。
このままじゃ、結界を突き破る。

「ダツ、ダメ！」
サクヤが叫ぶ。

第八章・作戦は、上が考えた、机上の空論（後書き）

感想よろしく

第九章・きれいに舞い散る彼岸花（前書き）

キャラクターデータベース

「伝説の魔法使い（本名：霞原綾野）」

神の草魔法を使える。

得意魔法系統：草魔法

性格：？

B 82 W 56 H 65

年齢：34

身長：172

特技：瞬時に世界中の花をコントロールできる
趣味：造花作り

第九章・きれいに舞い散る彼岸花

サクヤは、目をつむった。

「あれ？」

結界は無事だ。

すると、田の前でサキがバリアを張っていた。

「サキ……」

バタツ

伝説の魔法使いは倒れた。

「危なかつた！」

レイミの周りにあつた光が消えた。

成功したらしい。

「ちょっと、大丈夫？」アヤが近づいてくる。

「アヤ、おかげり～」

キリノがそう言つた後に付け加えをした。

「何？それ

「えつ、あく本体」本体は草でぐるぐる巻きにされている。
しかも、それをアヤが引きずつていて。

扱いはゴミだ。

「さてと、本体の顔でも見してもらいましょうか。」

レイミが近寄り、草をちゅうとめくつた。

「やっぱり貴方だったのね。」

レイミの言葉に全員が疑問符を浮かべた。

「へつ？知ってるの？」

「しかも、やつぱりって…」

「どういう事?」

次々と質問が飛び交う。

「あー、こいつタダの魔法バカよ。」「へ?」

サキが疑問符を浮かべる。

「この世界で一人だけ…いや、一人だけだった、全身操りができる人物。綱谷香季（アミタ一力オリ）よ。」

間をおいてから、レイミは口を開いた。

「ほら、結構前にあつた、リツコの連續殺人事件の新犯人よ。」

リツコ殺人事件とは、8年前に起きた殺人事件で、犯人のリツコに魔法捜査の後が見られたので無罪となつた事件である。

「えつ、でもあれ、犯人見つからなかつたんじや…」「紙面上わね。ていうか、マスコミもそんな昔の事件を忘れていたのよ。」

「それで、ま、判決はもちろん次元追放。」

「そんな真実が!」

驚いたのは、サキだけではない。他の皆も呆然としている。

モアイ像だ。

「帰るか。」

アヤが言った。

「ちょっとまって。」

その声に全員の背筋に冷や汗が流れた。
なんせ誰の声でも無かつたからだ。

「誰!」

サクヤが声を上げる。

声は少し震えている。

「あーの一ー」

ふと足元を見ると伝説の魔法使いが倒れている。
「もしもーし」

「あっ、！」

全員が声を上げた。

忘れていたのだ。

サキが速急に回復魔法をかけた。

その後、色々と事件についての説明をした。

「それで、私に彼岸花を生やしてほしいと。」

「まつ、率直に言つとそういうこと。」

「いいわよ」

彼女の周りに結界ができた。

魔法が終わると、周りに花が巻き散つた。

色とりどりの花が舞つた。

しかし、どの花よりも、笑つている皆の笑顔が一番きれいだつた。

「助けてくれたお礼よ。」

降りしきる花びらの中、8人の魔法使いは、笑つていた。

その後、伝説の魔法使いはその後保護され、カオリは前回同様引きずりまわしながら警察にプレゼントした。

第十章・夏の炎天下の中で掃除をすると倒れる。（前書き）

キャラクターーデータベース

「アミタニカオリ」

世界に一人だけの全身闇操りができる

得意魔法系統：闇魔法

性格：？

B? W? H?

年齢：？

身長：？

特技：？

趣味：？

第十章・夏の炎天下の中で掃除をすると倒れる。

まあ、彼岸花は復活した訳で、患者はほとんど治療が済ほとんどが退院していった。

一連の事件に関わったサキは、皆の勧めもあり軍人になった。また、その功績から階級は小佐。

そして、サキ達の活躍と実力が相手にも知れ渡り最近は何の事件も起きない。

こちらからも、相手の場所が特定できず踏み込めない。

まあ、今は仮の平和になっているという訳だ。

「とにかくで、大掃除をしよう!」

サキが目覚め早々皆を外に集めてどんなでもない事を言い出した。

「どうこうこと?」

全員が聞き返す。

「そういうこと

天然の答えが返ってきた。

「てことで、各自自分の部屋を奇麗にしなさい!」

・・・

「あの~私の部屋、昨日掃除じたばっかなんですが……」

ユイが言つ

「えつ」

「あたしも右に同じ」

アヤがユイを指す。

「えつ」

サキの口が少し開いた。

「あたしもよ」

サクヤが手を挙げた。

「えつ」

サキの口がまた開いた。

私も同じく

三十九

一
え
二
三
四

サキの「か微妙に開した」

同類功

「えっつっつっつ

サキは口を開いた

「せひたゞく」

キリノも言つた。

תְּהִנֵּנָה

サキの伸びた顔がエキを見つめる

「あたしもやつたよ」

© R. D. L. 1997

卷之三

十二〇題外材料

四庫全書

「スル懸念」第二回

あやまつとい。可放ざか。

「いいよ、別に」

皆の温かい目がサキを見つめる。

皆がサキの部屋に来た瞬間、温かい目が冷たい目へと変わった。

さたな

「云ナシ」

「ギブ」

思いを口にした。

「体長、ミコキが倒れました。」

レイミがミコキをつれてアヤの前に來た。

「体長、ユキが腹痛を起しました。」

サクヤも來た。

「体長、キリノがおかしくなりました。」

ユイも來た。

「体長、速やかに御決断を。」

「退け、退却！本陣へ戻れ、『ミ艦隊は強すぎる。』

皆が帰ろうとする…

「みんな待つて下わい～」

サキが近づいてきた。

「ゴミ艦隊の親玉が突撃を仕掛けできました。」

「全力で振り切れ～！」

サキは掃除は好きだが、溜め込むのも好きなのだ。
なので、一ート生活者みたいな部屋になっていた。

「ね、ね、お願ひします～～！」

サキは涙目になりながら、説得を続けていた。

「わかったよ」

アヤがOKした。

皆もぽつぽつとOKした。

「あ、ありがとうございまーす！」

そんなこんなで掃除が始まりました。

がー

「サキ、この変な靴下いる？」

ユイが黒い靴下らしき物体うを取りだした。

「それマジックアイテムです。置いといて下さい。」

「

サキは、掃除をしながら答えた。

「サキ、このカップラーメンの容器みたいなのが？」

今度はキリノ

「それもマジックアイテムです。」

カップラーメンの容器を持ちながらキリノは固まつた。「絶対マジックアイテムじゃないよ。」とシシコミたかたがやめておいた。

「サキ、このカビたキノコわ？」

「サキ～このビール瓶わ？」

「サキさん、この腐った鯛わ？」

「サキ殿、このゴミ袋一式わ？」

「この使った綿棒わ？」

「この茶色いトマトわ？」

皆の質問が来るたびの

「それもマジックアイテムです。」

と受け流す。

「ようやく終わった～」

サキが汗を手でぬぐいながらひと言つた。

「嘘つけ！」

皆は叫んだ。

さつきのマジックアイテムを廃棄処分しようと、一生懸命ゴミ箱にマジックアイテムを詰めていく。

「あんたね～」

不服の声が聞こえる。

そうして、この穏やかな一日は過ぎてこつた。

第十一章・ロボは大き過れるか動かない。ちなみにワープして8%できない。

キャラクタ

第十一章・ロボは大き過敏な行動かな。ちなみにワープ速度8%ださない

「おーい、皆やーん!」「
アヤの呼ぶ声が聞こえる。

「ん?」

部屋から金額が出る。

「なに?」

皆の疑問をユキが代表して聞く。

「なんか、事件です。」

「へつ? 事件?」

「そうです。あつ! じつけや こられないと。早く仕度しなきや。」

アヤが慌てて部屋に戻り…

「はやつ」

ました。と思いきや帰つてきました。

「なに突つ立つてゐのー。早く仕度してー。」

「武器持参?」

「当たり前でしょー!」

「じひー! 遅い!」

「いや。アヤが早すぎなんだつて。」

皆の率直な思いを代表してサクヤが言いました。

「つべこべ言わないー。」

「せつ、早行くよー!」

ようやく着いた。はずなのに、町が原型を留めていない

「何?あれ」

「ロボット?」

「センス悪つ」

「あれ、廃材で作ったんじゃない?」

燃え盛る町の中の巨大とまでは言えないロボットに思いを口にする。

「アヤ、あれを倒せと…」

皆の呆れた気持ちを代表してユイが言いました。

「そっ！」

開始早々26秒で

グチャ、バキ、グサ、バリッ、ブスー、ボンという怪しい音が聞こえ

開始早々42秒でドカーン

ロボットは壊れました。

「ふう弱かつた。」

あまりの弱さに…

「ねつ、さつきネジが動かなかつた？」

ふとキリノが口にするや否や、そこいらに散らかっている貴金属（残骸）が空中に舞い急に襲ってきた。

「何！」

全員がバリアを張る。バリアの外では貴金属がバリアに当たって火花を散らしている。

しかし、貴金属単体では攻撃力が低いため、摩擦熱で燃え尽きたゆく。

「この中なら一安心ね」

確かにバリアの中なら攻撃は完全に無害だ。
しかし

「何これ！」

ボルトが自爆をし始めた。

バリアの被害はじょじょに深刻になっていく。

「爆発するという事は

と、レイミが言うと

「近くに魔法使いがいるということね。」

サキが応答する。

「でもどうやって探すの？」

ユキが質問する。

『とりあえず、隙を見て散会しよう』
これはレイミの脳コントакト。前に一回使って以来、使用していなかつたので全員が少し驚く。

バン

ドカン

次々に襲い来るネジやボルトや装甲板
「くそ」隙なんかないじゃない
サクヤがムカついて攻撃をした。

「ん？」

サクヤが何かに気付いた。

「わかった！」

「何が？」

「ボルトの次にネジが飛んでくる時は装甲板が反対に飛んで来るの。

「んで？」

「だから、装甲板に攻撃して。」

「何で？」

「いいから。」

「わかったよ！」

全員が攻撃をしてみる。

ドン

装甲板が爆発した。

すると、近くにあつたネジやボルトが攻撃機能を停止した。

「どうこう」と？

アヤが聞く

「つまり、装甲板が操作魔法の受信機なわけ。」

「なるほどー！」

『んじや、これを使って隙を作つて散会しよ。全員が親指を上にあげた。OKの合図だ。』

第1-2章：しょせんメガネはサブアイテム的存在みたいな。

バン

次々に破壊される装甲板、機能を停止するボルトやネジや配線。「ねーまだ？」

全破壊を夢見る一同は頑張っていた。

「もうすぐじやないの？」

見たところ装甲板一つにつき停止するボルトやネジや配線はどれか

2つ。

「よつしゃー！ボルト全滅！」

「やつたー！ネジクリア！」

「配線、全滅完了！」

すべての残骸を破壊しあう一同は喜んでいた。

「おいおいおい！僕の可愛いポチちゃんに何してくれるだい！」

目の前に、黒い長い髪をして、メガネを掛けたいかにも頭の良さそうな女性が現れた。

「誰ですか？」

「私は、超天才発明家の大内由美だ！」

「すみません、知りません」

「…」

「そんな事は、どうでもいい、よくもポチを…」

「ポチってさつきのロボットですか？」

「そーだよ！」

「キリノ、あの人変態だよ」

「そだね」

「おもいつきり聞こえてるよーー、誰が変態だ！」

「ねーねーサキ

「ん？」

「今日の晩御飯何？」

「キムチ鍋」

「やつた！」

「キ・ム・チ・な・べじやねー！、人の話を聞け！」

「すいません、うるさいです。」

「あー、もう頭にきた！」と言いながら手にあつたボタンをおす。

「おい、ミコキ、あれなんだ？」

青空に何かが光る。

「……」

「逃げろー！」ドカーン。

上から巨大なビームが飛んできた。

「見たか！『半径6メートルを丸々破壊君3号』の威力！」

「なんだなんだ、あのネーミングセンスの欠片も無い名前は。」

「ネーミングセンス無い言うなー！」

少し、いや、かなりキレ気味な大内由美は、さつきの『半径6メートルを丸々破壊君3号』の発射装置のボタンを連打する。上から無数のレーザーが飛んでくる。

「なんか、ヤバくない？」

サキが全員に問いかける。

「うん、物凄くヤバい」

全員がハモつた。

第十三章・18番？／キムチ鍋？キムチ鍋？

「ハハハハ、私が新世界の神だ！」

アホなことを口にしながら、ボタンを押しまくる大内。

ボタンに手応えがない。

たぶん、発射ボタンを押す時に新世界の神だのアホな事を考えていたら手につけた加速がドンドン強くなつてボタンのヴァネが耐えきれなくなり中にある装置を壊したのだ。

まあ、簡単に言うと故障。上から何も落ちて来ないとなると、話しは別で…

8対1の圧倒的戦力差になるわけで…

当然、大内わ捕らえるわけで…

いつもの十八番引きずり回しの刑をつけ…

当然、ボロボロになりながら、警察に突き出されたわけで…

一件落着と言つたわけで…

そのまま、スーパーでキムチ鍋の材料を買って帰りました。

どうも、お後がよろしいようで？

と、言つたものの、話しあまだ終わつてないわけで…

「わーい、鍋だ！」

「…」

「ねー、ユキ、一つ聞いていい？」

「なんだい、サクヤ君。」

「これは、何鍋？」

「キムチ鍋」

「…」

「どう見ても、闇鍋だろ？ガアアアア！」

「具からして、病み鍋だね」

「眞いこと、わんで良いから」「眞いこと、わんで良いから

「いいかんじに微妙な温度加減ね」

「私達の空氣がね…」

「あなたも眞いな」

「眞くないつて」

「この病み鍋だけに?」

「…」

「手づまつた。いや、煮詰まつた。」

「ほう、そうか」

「ほな、早速頂きましょ'うか。」

「ユキ、もう一度聞くよ、これ何鍋?」

「闇…じゃなくて、寄せ鍋?」

「あつそう、なら大丈夫ね。」

その日、トイレが寄せあつたようでした。
おあとがよろしくようで?

第十四章・マジで…むづかく最終章ーその前に魅惑の男性アヤシマエ(痴女)ー

今日は長編だ〜ーあと、マジでなんなん最終章に突入だ。

第十四章・マジで…むづく最終章!—その前に魅惑の男性アヤヒエ（アキ）—

朝10時3分23秒。

昨日の闇鍋のせいで生死をさまよつていた皆さんは、チャイムで田
が覚めた。

普段は、こんなボロアパートに人が来る」とはない。来るのは、新
聞屋ぐらいである。

サキが仕方なく出る。

そこにいたのは！

なんと、初出場

『男子』様であつた！

「あの〜、なんでしょうか？」

眠たいながらも、話しかけたサキ。

「すいません、アヤはいますか？」

「いますけど…読んで来ましょつか？」

「お願ひします。」

サキは、階段をかけのぼる。

階段をかける少女がアヤ部屋についた。

ドワがあいた。

少しビビッたサキ。

「何で私がいるとわかったの？」

「何でつて、気配がしたからに決まつてるじゃない。」

サキは

『決まってネーヨ、てか貴方はどいじやの殺し屋だ！』とシッコミた
かつたが、眠たいのでやめた。

「客が来てる。」

サキが言った瞬間

バタ！

大きな音がした。

全ての部屋のドワが開いたのだ。

「…どうしたの？」

苦笑いを浮かべる。

「どうしたって、気配がしたからに決まつてゐじやない。全員がハモつた。

「・・・」

「決まつてネー三`てかオマヒラせビノの殺し屋だ！」

なにはともあれ、アヤは密のところに行つた。

つこでに暗もつこへ行つた。

「あ、『ウジ君…』

アヤが言つた。

「どうも～」

『ウジ』と書つ男性は少し余釈をした。

「え、何?何?アヤの彼氏?」

レイミのシッ『ミ』が入る。

「ええ、そうよ。」

「・・・」

「なんですかー！」

お決まりのハモリシッ『ミ』

「嘘ですよ～」

『ウジ』は、少し笑いながら言つた。

「なんだ…」

テンション急降下な全員。

「で、何のよつ?」

「アヤ、僕と、結婚していくださー。」

「・・・」

「アヤは、私の嫁だー！」

「さつきの続きを……、シシ『ハ違一』…」

アヤが笑いながら言った。

「じゃあ、本題に入ります。」

「ウジは、落ち着いた様に言った。

「天使の居場所が分かりました。」

「・・・」

「なんですねー…」

「で、何処。」

「ハジの、隣のコンビニでバイトしてました。」

「・・・」

「なんじやハモーー!」

「ま、冗談はおこといて、つこて来て下せ。案内します。」

「ハジ…」

全員が驚いた。

「隣のコンビニだるーがー」

「まさか本当にバイト?」

「いえいえ、あれは嘘ですが。」

「じゃあなんで?」

「食料を調達しに。」

「食料つて、そんなに遠いの?」

「遠くは無いのですが…」

「その…、森とまでは分かつたのですが、森の何処にいるかが分からせんので、自力でさがせとのことなんで…」

「どんだけアバウトな…」

全員が苦笑にする。

「食料以外何が要るの？」

「あ、アタシ今日発売の雑誌買わないとー。」

「キリノ、空氣読もうぜ」

「あ、ビールとおつまみ買わないとー。」

「なにか、サキ、お前は森で宴会でも開くのか？」

「あ、携帯の予備充電器買つておー！」

「ユイ、何に使かうの？」

「ネット」

「たぶん、圈外だーー。」

「サクヤ、うるさい。」

「ごめん、『ごめん』

サクヤがアヤを見た。

「・・・」

「何持つてんの？」

「え、見てわかんない？」

「分かるよ。」

「じゃあなんで聞くの？」

「クラッカーをどうするつもりだ？」

「んー、鳴らす。」

「宴会でも開くのか？」

「宴会と言つより、宴かな？」

「同じだー！」

「サクヤ、じゃあ聞くけどアンタが持つてるそれ何？」

「これ?、ロープ」

「イノシシでも捕まえる気かー！」

「捕まえネーヨー！」

「そして食う。」

「人の話しへ聞け！」

「イノシシじゃなくて、天使を捕まえるのに使うのー。」

天使? なんて?』

「すいません、殴って良いですか？」

タメてあ

結局、パーティーグッズはだいぶん揃つた。サクヤはもう何も言いませんでした。

「さて、皆さん、車に乗つて下さい。田の前にま、長い車が止まつていた。

「乗りますか。」

「そうですね。

8人は、車に乗りこんだ。

では、『樹海の迷宮』『天使を探せ』『クエストへ地獄巡り』
道切符の旅～～略して『ドヰクH』を初めましょ～うか。

「イヤなパクリだな。

「までまで、片道切符つてことは、帰つて来れないって事じやない

か。
」

「あつ！すいません。

いい直しますね。『樹海の迷宮、天使を探せドギドキケヨスト』

地獄巡り往復切符の旅』 略して『トキワ庄』を初めましょ二か

〔 二 〕

「루이C」

「では、改めて

「オーラルウ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933e/>

四季蘭采～雛菊～

2010年10月10日15時41分発行